

## ② フィリピンで暮らして 青年海外協力隊の体験

岸 敏明

### 一 青年海外協力隊員として

日本から空路四時間のフィリピン共和国。一九七三年十月から二年間、私は青年海外協力隊の一員として、ルソン島北部とミンダナオ島中部で生活した。その経験を思いつくまに記してみたい。

フィリピンは熱帯性気候であるが、灼熱の太陽の下、雨季乾季を問わずさわやかで、一年中半袖シャツ一枚で過ごせる。七千余りの島々からなるこの国は五五ほどの民族からなり、それぞれ独自の言葉、習慣、伝統を継承している。主な言葉として七つの民族語があるが、国語は英語、カタログ語、スペイン語である。しかし日常は、自分たち民族の言葉で話している。みな親切な人たちだ。

私たち青年海外協力隊は、国際協力事業団が毎年数十人のボランティアの青年を発展途上国の技術協力のために派遣しているもので、私が行った一九七三年には、フィリピンへ八人が派遣され、それぞれの専門分野で活躍した。私は水道技

術の援助の仕事をしたわけである。

マニラ市の拠点から初めて行ったのはルソン島北部アブラ州の州都バンゲット市であった。アブラ州知事室に籍を置き州の土木技術者と共にバンゲット市をはじめ州内数カ所の町や村で水道施設の改良の調査や設計にあたった。バンゲット市は人口二〜三万人の町で、州が経営する泉を水源とした水道が戦前から普及していたが、施設が古く導水管が細いため、朝夕の水道使用時によく断水し、また石綿の導水管のため破損しやすい。一〇km先の泉から配水池までの導水管や配水管の付替えのための設計や工事の設計、助言にあたった。またこれと併行して、州内数カ所の町や村の水導施設の改良にも従事した。導管付替の設計をしたものもあり、新たな水源を探して測量、設計、図面化し、コスト計算までしたものなどもあった。このほか、灌漑工事のプロジェクトにも少しかわった。バンゲットでは初め州選出国会議員宅に部屋を借り、次に判事、支店長らも住む下宿屋へ

移ったあと、二階建の家を借りて住んだ。炊事、洗濯などは通いの人に頼んだ。

バンゲット市に八カ月ほど滞在しほぼ仕事の見通しがついた頃、要請によりミンダナオ島ブキドリ州の州都マライバライ市へ移った。同市も人口二〜三万人の町で、ここでも知事室に所属、州内の七、八カ所の町の水道改良に取組んだ。どれも州が設置、経営しているもので、ちょうど改良工事の予算を国に要求しようとしている時であったため、約半年間にこれらの町を次々にまわって測量、設計、コスト計算などをこなした。水源は川、泉、地下水などいろいろあり、改良の仕方も、地下のポンプの修理、管の付替え、新たな水源からの導入などいろいろな形態があった。途中ゲリラ活動活発化との知らせで二カ月ほどマニラに引上げられる一幕もあり、それをほさむ短期間にこれだけの所を処理するのだから忙しかつた。うちへ帰って仕事をすることもたびたがなかった。幸い国に要求した予算はほとんどついた。

- 一 青年海外協力隊員として
- 二 フィリピンの生活
- 三 アジアの研修生と接して

マライバライ市では、市内でレストラン、印刷業などの事業をしている人の家に下宿をした。たいへん親切なお宅で、毎日食べ切れないほどの食事を出してくる。たべ残すと何が欲しいかたずね、当地にないものでも翌日には食卓に並べてくれる。一詣に行った協力隊員の中では、最高の待遇で、仲間からうらやましがられた。帰るときには盛大な送別会をしていただいた。このほかにも親しくなった人は数多く、いまも手紙やクリスマスカードをやりとりしている人は数家族ある。

### 二 フィリピンの生活

フィリピンでは労働人口の七〇％が農業従事者であり、失業者が多く、貧富の差が激しい。ひとりでも成功者が出ると親類縁者が頼ってくる。

私の友人は、日本企業に勤めており、高い給料をもらっているのに、前の職場にいた時よりも生活が苦しいと言う。聞

くと、親類が五人も同居しているからだとか。

また、子供に対する教育熱はとても高く、子供達の将来の志望は、女子がナース、男子はエンジニアが断然多い。これは、社会的にも地位が高く、外国に出て働くこともでき、高給がとれるからである。

宗教はカトリック教徒が国民の八三%近くを占め、プロテスタントなどを含めると、実にキリスト教徒が九三%にもなる。日曜ミサには、若者男女がきれいに着飾って、教会に集まって来る。若者達は、キリストの教えを受ける場と共に、社交の場とも考えているようだ。カトリックは、目に見えない力として、人々の生活を強く支配している。

首都マニラは、近代的ビルが建ち並ぶ大都市であり、活気に満ちている。

マニラをはじめ、どの町や村でも、トライスクールやジブニーが走っている。

トライスクールは、オートバイにサイドカーをつけたもので、一度に四〜五人乗れる。けばけばしい飾りのついた、色鮮やかなジブニーは、後部バンパーまで足をかけて、人がしがみつき、屋根の上までぎっしり荷物を積み、時にはニワトリや豚もいっしょに乗せて、でこぼこ道を猛スピードで走って行く。手を上げれば、どこでも停まり、また、どこでも(庭

先でも)降してくれる。降りるときは、

「プシュ」という口笛を吹くと、急ブレーキをかけてすぐ停まる。マニラに向かう長距離バスも同様である。この口笛は人を呼ぶ時やタクシーを止める時にも使われ、私など半年も過ぎると、「オーイ」と言わず、二〜三メートル離れていても、「プシュ」の一吹きで人を呼べるようになった。

はじめての町では、人なつこい彼らの話しかけてつきあいが始まる。必ずずとやっていいほど、戦争の話が出る。戦争の話は、避けて通れないものであるが、私としては、あまり喜ばしい話題ではない。時には、長距離バスの中で、「お前は日本人か」と現地語で罵られたこともあり、まだまだ年輩の人にとっては、戦争は過去のものではない。

ちょうどその頃、ルバング島で、小野田さんが見つかり、新聞紙上をにぎわした。

当時、ミンダナオでは、NPA(新人民軍)、MNLF(モロ民族解放戦線)と、政府軍の間で戦闘が激化し、内戦の様相を呈していた。しかし、新聞やラジオでは、何も報道されず、一般には知らされていなかった。

山岳地方の橋などにはトーチカ、町の出入口には装甲車、町のなかには完全武装の兵士がおり、時たま銃声がしていた。

た。

その半面、バナナやパイナップル、直径二、三メートルのラワン材などが日本に輸出されにぎやかな様相を呈していた。

話題の中に、国技であるバスケットボールの話がよく出た。どんな小さな町や村にも、必ず数チームあり、空地にはゴールが作られ、子供達がボールを追いかけていた。話の中に日本選手の名前がよく出てくるが、私はどうもわからなかった。

村の家は、木と竹で造った高床式が多く、家のまわりには、ヤシの木が繁り、ニワトリや豚が放し飼いにされている。ニワトリは半野性化しており、五〇〜六〇メートルは飛び、よく木や屋根の上にとまっている。

町のなかもヤシや草花の緑で囲まれ、スペイン統治時代の影響か、ラテン風のたた住まいだ。彼らは早起きで、起きると必ず水浴びをする。床は毎日、ヤシの実を半分に分けたものを足で踏みつけるようにして磨き、ピカピカに光っている。女性は、あちこちの水場で、棒で叩いて洗濯をする。

蚊が多いので、寝る時は必ず蚊帳をつる。村ではランブ生活のため、皆早寝である。「子だくさんなのは、ランブのためだ」と彼らはよく酒の席で言っていた。

日本の物質文化と異り、どんな物でも

大切にし、繰返し再利用し、使い捨てたりしない。例えば、一般的な車に混じって、三〇年前の車が走っていたりする。車検がないのと、動けば車とみなされるので、あちこちから部品を集めてきて、自分で作る。彼らは、そういう事に關しては、天才的な才能を持っているようだ。

また、食堂で、食べ残した物は必ず包んでもらい、家に持ち帰る。店でもごく自然にその用意をしてくれる。

女性は、スタイルが良く、色鮮やかな服を身につけている。バナナの繊維で織ったフーシーという布地は風通しがよく、軽く、この刺しゅう入りの紳士服は、パロン・タガロと呼ばれ、どんな場所でも通用するフォーマルウェアとなっている。彼らはとてもきれいな好きで、服には必ずアイロンがあててあり、頭の先から靴の先までおしゃれをしている。

主食はどこでも米である。年輩の人は知っていると思うが、細長く保存がきくように炊いているためか、パサパサのご飯である。慣れるのに数か月を要した。

また、赤飯のような赤い米もあり、この米は原始的種類に属しているが、わりあいとおいしい。初めて飯べた時は、赤飯が出てきたのかと思っただけだった。どの家でも、左手にフォーク、右手に

スプーン(杓抜き、缶切りの代用にもなる)が一般的な食べ方である。時には手でも食べる(寿司を食べるように)。こちらではご飯にスープをかけたたり、おかずを混ぜ合せて食べるので、慣れないと手のひらにいっぱいごはん粒などがついてしまいうししようもない。しかし、慣れると手で食べる方がおいしかった。

おかずも、高温気候での保存を考慮してか、肉、魚料理にニンニクや各種香辛料をふんだんに用い、酢の味を巧みに生かし、トマトで味つけしたものが多かった。

日曜日、市場は早朝より、遠くから自分の作った野菜や果物を持って来る人で、ふだんよりいっそうにぎわう。

肉類は、皮、骨付きのぶつ切り、ニワトリは必ず生きたまま(血を料理して食べるため)売られている。値段は、お互いのかけひきにより決まる。たまに市場に出かけ、安い買い物をしたなと思っ

て帰ってくると、メイドに「高い買物をしてきた。まだまだ安くなります」と教えられた。

フィエスタというお祭りが年に一回あり、町の広場は、二、三週間前から、見せ物小屋やからん車、いろいろな屋台で占められ、大勢の人でにぎわう。当日

は目抜き通りを音楽隊を先頭に美人コンテスト参加者が乗ったデコレーションカーやボーイスカウトなどの行進が行われる。

どこの家庭でも、パーティの用意があり、見知らぬ人にも、あちこちから「家においで」と声がかかる。なにせ、一軒や二軒ならごちそうになれるが、五、六軒それ以上になるとうれしいやら恐ろしいやら(?)。もう大食漢である彼らにはつき合いきれない。これは、陽気な人なつこい彼らのフィリピン・ホスピタリティと呼ばれる客のもてなしや相手に対する心使いである。

夜は、ランブの下で、さとうきびややしから作った酒やアルコール度の高いビールを飲み交わし、プソイというジャンルに興じたりしている。

### 三——アジアの研修生と接して

現在、水道局では、海外から技術研修生を受け入れており、私も仕事の一環として、その業務に携わっています。

今まで、タイ、インドネシア、フィリピンから研修生が来浜しております。数か月間、研修生と行動を共にして、感じ

たことを私なりに記してみます。

まず最初に研修計画をたてるわけですが、生活様式、宗教、国民性など多くの違いを理解し、日本人の生活ペースではなく、研修生のペースに合わせ徐々に日本に慣れるよう、プログラムを組んでおります。日本人のせっかちに対して、研修生はユックリズムです。これは、彼らの国が熱帯性気候のため、ゆっくり日陰を求めて歩き、日差しの強い日中は休息を楽しんでいるのです。スローテンポなのはそれなりの習慣と言えるようです。

庁内報によれば、全職員の一割は外国語が話せるということですが、学校卒業後何年も外国語に接する機会がなければ不安も大きいことと思います。しかし、いざ本番となると、担当者は必要な技術用語はすべて英語で話せるよう調べてあり、時には日本語を交えながら、無事研修を終わらせています。大変な努力をしているのでしよう。

職員にしてこうなのですから、彼ら研修生の不安や期待はいかばかりでしょう。

ですから、日本に来ているからといって生活様式、習慣等は数か月で変えられるものではありません。むしろ、妻子と別れ、職場の期待を一身に集めての異国での生活によって、少なからず、ホームシックやカルチャーショックを受けているようです。彼らの気持を理解し、彼らのペースを守ることは、研修の成果を高めるのに役立つと思います。

研修生は、横浜に来る前に二か月間、日本語を勉強してきますが、片時も辞書を離さず、言葉が通じないと辞書を開いて指さし、お互いに納得し、にっこりしたりすることもありました。

研修に当たって、研修先の担当者がい

若い人でも半数近くは逃げてしまうとのこと。日本人の横文字苦手意識は根強いものらしいです。言葉が通じないことは、意志の疎通を欠く部分的要素には

ちばん気にかけているのは、言葉が通じ

身振り手振り、外国人に接することも

必らず最初に「日本語を話せますか」と

と国の友好に発展していけば幸いです。

〈水道局工事事務部計画課〉